

アメリカで育てる

永住や長期滞在の子どもたちの教育のために

INFOE (海外子女教育情報センター)
松本輝彦

第11回

コミュニティ・カレッジから4年制大学へ

-- ヒロ君の挑戦 (3) --

アメリカに住む日本人の子ども達が多様です。成績優秀で有名大学へ、という高校生ばかりではありません。思春期にちょっと寄り道したり、スポーツに情熱を注いだ高校生でも、ゼロから再スタートして大学を卒業できる。そんな、アメリカだから与えられる「セカンド・チャンス」を生かして、コミュニティ・カレッジ (Community College、以下「カレッジ」) から有名4年制大学への転進学 (transfer) に挑戦するヒロ君のお話です。

ヒロ君、エッセイと格闘

昨年9月に始まった秋学期が終わりました。

ヒロ君、Englishのクラスで目標としていた成績「A」が取れませんでした。課題で最も配点の高い essay writing の苦戦が原因です。

ヒロ君の英語力は、大学1年生として決して低くありません。先生の指導するエッセイの書き方に従って書けなかったことが、苦戦の最も大きな原因です。

このエッセイでの苦戦は、実は、アメリカの大学1年生が全員経験することです。

自己主張の道具

「自分の意見を相手に伝える」あるいは「自分の意見を相手に認めさせる」ための自己主張のスキルを身に付けさせることは、「民主主義」を国のモットーとするアメリカの学校教育の目標のひとつです。

口頭での自己主張のトレーニングは幼稚園の「Show & Tell」からスタートし、プレゼンテーションへと続きます。その後、文章での自己主張のために、エッセイの練習が始まります。

「essay」は日本語で「随筆」と訳されることが多いのですが、その内容は、全く異なります。むしろ、「小論文」に近いと言えます。与えられたテーマに対して、自分自身の意見を考え出し、それを明確な証拠や理由を使って、論理的に文章で主張していくものです。

小学校高学年のエッセイの型の練習からスタートし、中学・高校と続き、大学で主張の仕方や文章のスタイルを身につけて、やっとトレーニングは終わりです。

ヒロ君は、大学レベルの様々な文章のスタイルを使って書く課題や、論理的な文章の展開に苦労したようです。

大学での学問・研究の道具

アメリカの大学では、入学と同時に Freshman Writing と呼ばれるクラスで、徹底してエッセイの書き方をトレーニングします。「内容のしっかりしたエッセイが書けなければ、大学生ではない」と言わんばかりの指導です。その厳しい指導の目的は、「自己主張」から「大学レベルの学問・研究に不可欠な道具・スキル」へと移っていきます。

アメリカの大学教育は、第一に専門的な知識を学生に習得させること、第二にその知識を使って新しい問題を解決していく能力・スキルを学生に身につけさせることを目標にしています。講義やディスカッションで、第一の目的である知識の習得やその知識のより深い理解を進めます。そして、第二のために、課題のほとんどがエッセイで答える形式になります。

エッセイと言うと、文章の表現に気を奪われますが、実は、テーマについていかに考えたのかで評価されます。Englishの授業だけではなく、全ての専門教科でエッセイやレポートが要求されます。専門教科の教授は、英語の文法ではなく、そこに書かれた主張とその論理的な展開を読み取ろうとします。まさに、そのために、エッセイのトレーニングを大学1年生で厳しく指導されるのです。

がんばるヒロ君

苦戦はしましたが、エッセイの大切さと大変さを、ヒロ君は身にしみて経験し、学びました。大収穫です。

Englishで「A」は逃したものの、他の3教科では好成績を残したので、4年制大学にトランスファーするのに必要な成績は維持して、がんばっています。

次号では、ヒロ君の1年間の勉強を振り返ります。

松本輝彦